

【63】春の車窓から

ゴールデンウィーク明け、所用で仙台へ旅した新幹線の車中でのことです。

晩春の、山頂に雪の残る日光、那須、蔵王の山々が青空を背景に連なり、中腹から麓には新緑が広がり、線路近くの水田には一面に水が張られ、日本の田園地帯の最も美しい季節です。

往きは窓側の席だったので十分に風景を堪能でき、復路は山の名前も確認しながら賞味しようと、地図を用意して乗り込んだのですが、指定席が通路側で窓側の席には若い女性がもう座っていました。

問題は列車が動き出すと、彼女は窓のブラインドを降ろし、バッグから取り出したスマホに向かって何やらやり出したことです。

陽が差し込む方向でもないのに、ブラインドを開けてくれと頼もうかと思いましたが、変な爺さんと思われてもと考え直し遠慮しました。

一時間半の旅は退屈で苦痛なものとなりました。

もう20年近く前のことでしょうか、飛行機の旅で努力して窓側の席を確保したのですが、中央部の座席にいた母親と子供2人のうちの、小学生らしい男の子がつまらなそうにしていたので、窓際に座らないかと声をかけ席を譲ってやったのです。

そうしたら、なんと男の子はブラインドを降ろして、ゲームマシンを取り出してゲームを始めました。せっかくの好意が無駄になったかなとガッカリすると同時に、現代っ子には飛行機の窓から地上を見下ろしたり、雲の中を飛んだりする体験が、心を踊る好奇心の対象にならないのかと驚きました。

小生、子供の頃は、電車は別にして汽車に乗る機会に乏しかったので、親の実家の富山へ連れて行ってもらったときなどは、上野～富山間の8時間、窓にしがみついて暗くなっても外を見ていたものです。

子供に限らず現代人は大人も含めて、車窓から外の風景を楽しむというのは、初めての観光地なら格別、価値が低くなったようです。

最新の新幹線車両の700系（JR会社により呼び名異なる）の窓は、飛行機の窓よりひとまわり大きいくらいで、60年前の0系の車両の広く大きい窓に比べて著しく小さくなったのは、技術上の理由もあるのですが、窓から外を見なくなったという時代の動向を反映しているのかも知れません。